


第3章 景観に配慮した公共事業の事例 参考事例編

【トピック1】コンクリートの表面処理方法に関する比較研究

◆概要： 農村地帯や丘陵地などを通過する道路では、切土、盛土による法面が生じることが多く、総じて防草対策に苦勞している。最も一般的に実施されている防草対策は張コンクリートであるが、歩行者や自転車の通行機能を確実に確保でき、維持管理が容易である反面、景観に悪影響を与えるとの指摘も少なくない。

このため、香岐振興局管内の県道において、張コンクリートに着色料を加えたり、骨材の種類を変えるなどの試験施工を行い、外観の経年変化を観察している。

◆経年変化の状況（一）渡良浦初瀬線

		設置後3ヶ月（H22）	2年経過（H24）	5年経過（H27）
パターンA	黒色顔料を添加			
パターンB	砕石（3%増）			
パターンC	細骨材として真砂土を使用			
パターンD	細骨材（3%増）			
パターンE	通常のコンクリート			

◆まとめ： どのパターンでも、時間の経過とともに表面が黒ずみ、周囲の景観に馴染んでくるが、施工直後は違和感の大きいものもある。景勝地や文化財の周辺などでは、当初から景観ダメージを抑える必要があり、地域の状況に合った方法を選択すべきである。

また、型枠に硬化遅延剤を塗り、脱枠後にコンクリート表面を洗い出すことにより、凹凸・陰影を付ける方法（洗出し工法）でも人工的な印象を和らげることが可能なので、併せて検討するのがよい。